

# 越谷にいた中世の豪族「古志賀谷」氏

令和5年度「ほっと越谷」の七夕フェスタ

元荒川沿いには川の流れによって堆積された小高い土地がみられる。そこには古くから人々が住んで集落が発達しており、周辺一帯を支配する豪族もいたと考えられる。それが鎌倉時代にここに館を築いて越ヶ谷郷(※1)を支配した豪族の古志賀谷氏と推定される。山崎善司氏[註]によると、古志賀谷二郎為基が、現在の岩槻区箕輪にいた箕輪氏から分かれて越ヶ谷郷に初めて進出した先は、四町野(現・宮本町)村の名主である会田太郎兵衛屋敷跡(現・角栄団地、迎撰院と「健美の湯」の間)であると推論されている。古志賀谷氏の館は越ヶ谷郷の中心と思われる四町野の共に構堀(豪族の構堀跡か)があった迎撰院と太郎兵衛屋敷あたりを考えたのである。

具体的に考察すると、江戸時代の四町野村には道路側入口に観音堂があった越谷山迎撰院(※2)をはじめ、押切の天満宮と地蔵院(天満宮の北隣にあった)、野尻の薬王寺(宮本町二丁目集会所)、御縄先の疣稲荷と弘誓寺(疣稲荷の北側、今は墓地のみ残る)と十王堂(宮本町一丁目集会所)があり、その西隣の神明下村(現・神明町)には三蔵院(神明町一丁目4の跡地)、村の鎮守の神明宮(※3、現・神明橋南詰め)、今は無き最勝院(宮子通りの神明二丁目270番台の「ねい堀」側)、清光坊(薬師堂神明二丁目集会所)、政重院(くるみ幼稚園北側の墓地)などがあり、また四町野村の鎮守かつ越ヶ谷郷の総鎮守でもある越ヶ谷の久伊豆神社(※4)は、迎撰院が神主を兼ねていたこと、久伊豆神社の神輿は四町野の人が担ぐこと、越ヶ谷の六斎市は中世の越ヶ谷郷の中心であったこと等からして、江戸時代以前の四町野は越ヶ谷郷の中心であり、越谷山の山号を持つ迎撰院あたりに、この地の開発の基盤を作った豪族古志賀谷氏が館を構えていたと推測することができるのである。

江戸時代になって現在の未開地の御殿町に越ヶ谷御殿ができ、その西側そばの四町野村の新開地に日光街道ができ、「越ヶ谷郷」の名称から名付けられた越ヶ谷宿が誕生し、中世からの六斎市も賑わいをみせた。その後、四町野村に代わって越ヶ谷宿が、江戸との交流を通して近郷の中心となって繁栄していくのである。

[註]引用文献:山崎善司(1991)「古志賀谷氏館跡と板碑」(平成3年2月9日、けやき荘 歴史散歩教室)

令和5年6月 加藤幸一

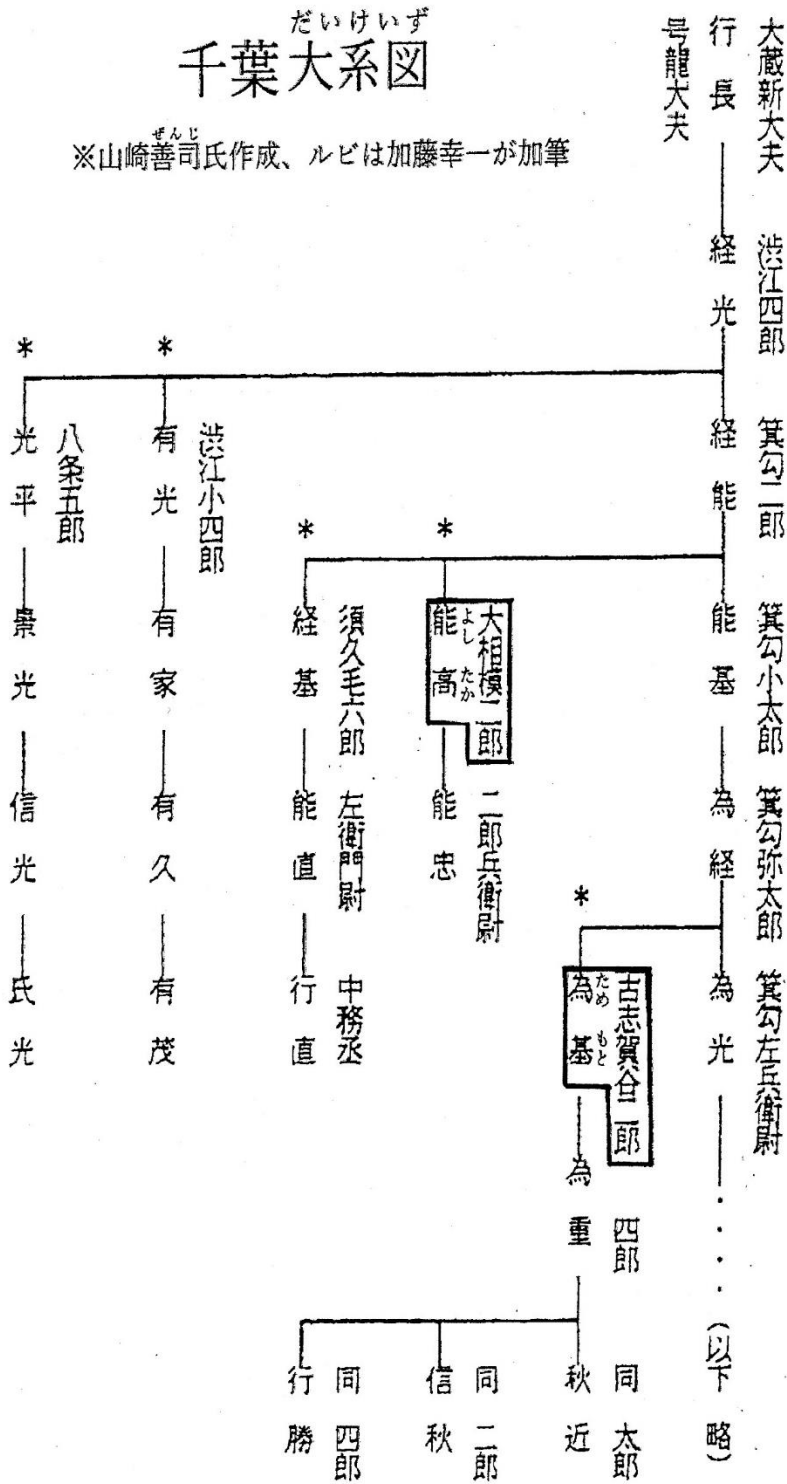


「平成28年10月改訂 出羽の歴史散歩マップ」に加筆



# 千葉大系図

※山崎善司氏作成、ルビは加藤幸一が加筆



※1. 中世の越ヶ谷郷…永禄五年(一五六二)の小田原北条氏の本田文書によると、「越谷・舎人(現在の足立区の一部)」は「大郷」であるという。越ヶ谷郷は、本来の元荒川筋と綾瀬川筋に囲まれた地域で、慶長年間の岩槻領釣上村の検地帳には釣上村まで越ヶ谷郷と呼ばれたという。江戸時代になると越ヶ谷郷は越ヶ谷領と言いつたえられ、西の端は荻島・神明・後谷・越巻までとなる。また福井猷貞著「越ヶ谷瓜の蔓」によると、東の端は八条領の登戸村・瓦曾根村もかつては越ヶ谷郷に含まれていたという。

※2. 迎撰院…迎撰院の山号「越谷山」は越ヶ谷郷から由来し、越谷山神宮寺迎撰院住職は越ヶ谷の久伊豆神社の神主も代々兼ねていた。神明下村(現・神明町)の鎮守神明神社…もとは現在の神明橋の南西詰めにあり、地元の古老によると大層立派な建物であったと聞く。また山崎善司氏によると、子供の頃に古老から現在の神明橋付近の元荒川の中州に神明宮があったと確かに聞いたが、大人になつてから古老に尋ねても知る者は誰もいなかったという。なお中州(中島)に寺社があつても珍しくはない。

※3. 越ヶ谷の久伊豆神社…江戸時代以前は四町野村(現・宮本町)と陸続きで、四町野村の鎮守であり、越ヶ谷郷の総鎮守でもあった。江戸時代になつて、天嶽寺の南側に人工の川が作られて、そこに天嶽寺によつて天嶽寺橋(寺橋)が架けられた。なお久伊豆神社は寺院と神社が隣り合うように「昔は迎撰院の隣に久伊豆神社があつた」との言い伝えが地元に残っている。真偽の程はわからない。

## 大相模郷にいた大相模氏の館

鎌倉時代の大相模氏も古志賀谷氏と同様に岩槻区箕輪にいた箕勾氏から分かれて大相模二郎能高が初めて大相模郷に進出している。その時期は、古志賀谷二郎為基(13世紀か)よりも早い時期(12世紀か)である。享保15年(1730)、大相模氏から中村氏に改姓し、今日に至る。

大相模氏の館は、広大な敷地の周囲に構え堀と土塁がみられた中村頼司氏の敷地(越谷市大成町二丁目331-1)と推定されている。中村頼司宅は越谷市内の最古の名家である。